

近年「増えた」魚と「減った」魚 ～水温および海流との関係から～

1. 「増えた」魚と「減った」魚

- 近年、本県ではタチウオやサワラの漁獲量が増加し、それとは逆にマコガレイやイシガレイの漁獲量が減少しています（図1）。
- 水産試験場では本県の重要魚種と近年、増加減少傾向の大きい魚種を含めた計29種を過去20年の漁獲量の変化から分類しました。
- その結果、増加傾向グループと減少傾向グループの2つに分けられました（図2）。
- それぞれのグループに含まれる魚種について分布の特徴から暖水性魚類、冷水性魚類、広域性魚類のいずれかに当てはめると、増加傾向グループは暖水性魚類、減少傾向グループは冷水性魚類が多く含まれることが分かりました。

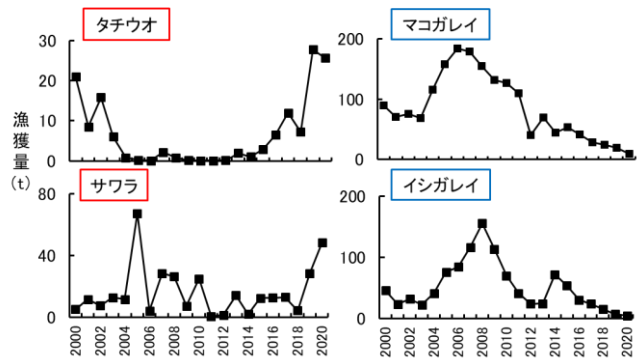


図1 漁獲量の推移

増加傾向グループ(16種)

アオメエン(暖)、キアンコウ(暖)、サワラ(暖)、シラス(暖)、
タチウオ(暖)、ブリ(暖)、マダイ(暖)、
ヤナギムシガレイ(暖)、ユメカサゴ(暖)、イセエビ(暖)、
サバ類(広)、サンマ(広)、ヒラメ(広)、マイワシ(広)、
ムシガレイ(広)、ヤリイカ(広)

減少傾向グループ(13種)

イカナゴ(冷)、イシガレイ(冷)、イシカワシラウオ(冷)、
マコガレイ(冷)、マダラ(冷)、ヤナギダコ(冷)、
サヨリ(広)、マアジ(広)、マコガレイ(広)、スルメイカ(広)、
マダコ(広)、カタクチイワシ(暖)、カツオ(暖)

※暖水性魚類: 主分布域及び主産地が茨城県以南;
冷水性魚類: 茨城県以北; 広域性魚類: 日本全体

図2 過去20年間の漁獲量による分類の結果と各魚種の特徴

2. 水温や海流との関係

- 近年の水温と海流の変化を図3に示しました。
- 水温は上昇傾向、黒潮続流の北限緯度および親潮第一分枝の南限緯度は北偏傾向で推移しています。
- この水温や海流の変化が先ほどのグループにどのような影響を与えているかを調べたところ、増加傾向グループは①海流との関係が強く、②黒潮の勢力が強いと増加すること、減少傾向グループは①水温との関係が強く、②水温が低いほうが増加することが分かりました（図4）。

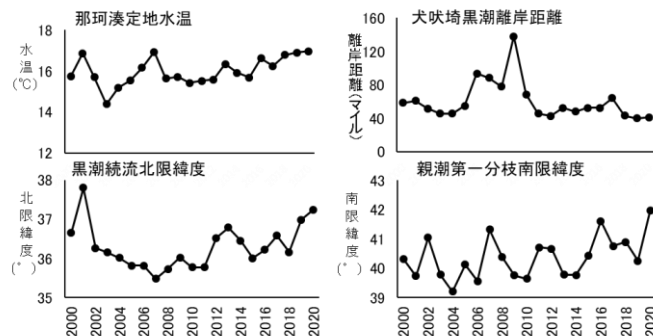


図3 水温と海流の変化

増加傾向グループ

- ①海流との関係が強い
- ②黒潮の勢力が強いと増加

減少傾向グループ

- ①水温との関係が強い
- ②水温が低いほうが増加

図4 分類の結果と各魚種の特徴

以上のことから、本県の漁獲対象種は大きく2グループに分かれ、水温や海流の影響を受けて増加減少をしていることが明らかになりました。水産試験場は今後も海洋観測等のモニタリング調査を継続し、海況の変化が魚類に与える影響について調査を実施してまいります。

回遊性資源部 大森健策